

医療用医薬品外箱の主要色相とカラーイメージに関する調査分析

崇城大学薬学部医療薬剤学研究室

吉岡祐三郎、山崎啓之、瀬尾 量

【要旨】

繁用されている医療用医薬品の外箱を対象に、薬効別に外箱の色相を調べた。又、薬学部6年生、薬剤師、外来患者を対象にアンケートを実地し、指定した薬効に対するイメージカラーを調査し分析した。その結果、国際的にも嗜好度の高い青色が外箱の色相にも反映し、アンケート結果もそれを反映していた。また、イメージカラーに性差はなかったが、薬学部6年生と薬剤師及び外来患者の間には相違がみられた。医薬品外箱に表示されている情報、特にOTC薬における情報は重要なことも多く、今後は医薬品外箱の主要色相と記載文字の色との組み合わせなどユニバーサルカラーデザインの考慮もなされるべきである。

【はじめに】

製薬・食品業界における製品パッケージに使用されている色相は、関連企業及び当該製品のイメージを表現していることが多い。最近では、デザイン心理学という新しい学問分野¹⁾も登場し、製品と人間との関係を心理学的な観点より考察し、製品開発に役立てようとしている。また色彩の心理学的効果を利用した色彩セラピー²⁾も行われている。今回、我々は医療用医薬品外箱の主要色相とカラーイメージに関する調査を行い分析したので報告する。

【方法】

実務実習関連の2薬局（高橋薬局、ケンコウドウ薬局）で繁用されている医療用医薬品（50種類）の外箱を対象として薬効別に分類した。薬効は、向精神薬、消化器系薬、循環器系薬、骨粗鬆症薬、呼吸器系薬、その他とした。各薬効毎に外箱を色相別に（赤系、青系、緑系、黄系）に振り分けた。外箱の色相は、黒色又は白色の背景色分を除き、2色以上用いられている場合は、面積を広く占めている色相を主要色相とした。なお、調査対象医薬品の商品名（会社名）は章末に資料Ⅰとして添付した。

次に、薬学部6年生、調剤薬局薬剤師及び外来患者の各20名（男性10名、女性10名）を対象として、薬効からイメージする色のアンケート調査を聞き取り方式で実地した。アンケート用紙の形式は章末に資料Ⅱとして添付した。

【 結果 】

1. 外箱の主要色相

医療用医薬品外箱の主要色相を、薬効別に分類したものを表1に示した。各色の右に示す値は外箱の数である。骨粗鬆症薬を除き、青色が各薬効群で外箱の主要色相に使用されていた。

表1 薬効別の医療用医薬品外箱の色相

順位	向精神薬 (N=10)	消化器系 (N=12)	循環器系 (N=7)	骨粗鬆症薬 (N=2)	呼吸器系 (N=7)
1	黄(4)	青(4),緑(4)	青(3)	ピンク(2)	青(5)
2	青(3)	赤(2),黄(2)	赤(2)		緑(1),黄(1)
3	赤(2)		緑(1),黄(1)		
4	緑(1)				

その他の薬効(N=12)は除外した。

2. 薬効別のカラーイメージ

アンケートの結果(資料Ⅲ)より、各薬効群の色相イメージを分析した結果を、図1に示した。循環器系用薬のイメージカラーとしては、赤色が60人中43人と群を抜いていた。また、抗精神用薬及び呼吸器系用薬のイメージカラーとして青色を選択した人が60人中の23人及び18人と多かった。消化器系用薬では、緑色の選択が60人中20人と一番多く、次いで青色が60人中14人であった。

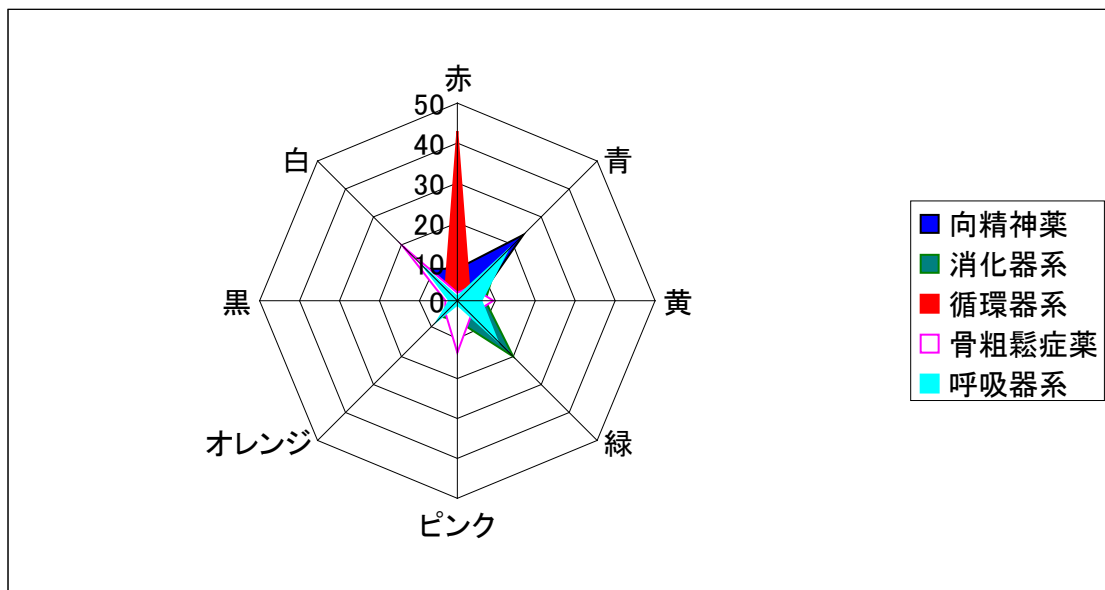


図1. 薬効別のカラーイメージ(総合結果N=60)

3. カラーイメージの性差

男女間で薬効に対するカラーイメージに相違があるかどうか、薬効ごとに分析した結果を図2 (a,b,c,d,e) に示した。男女間で大きな相違はなかった。

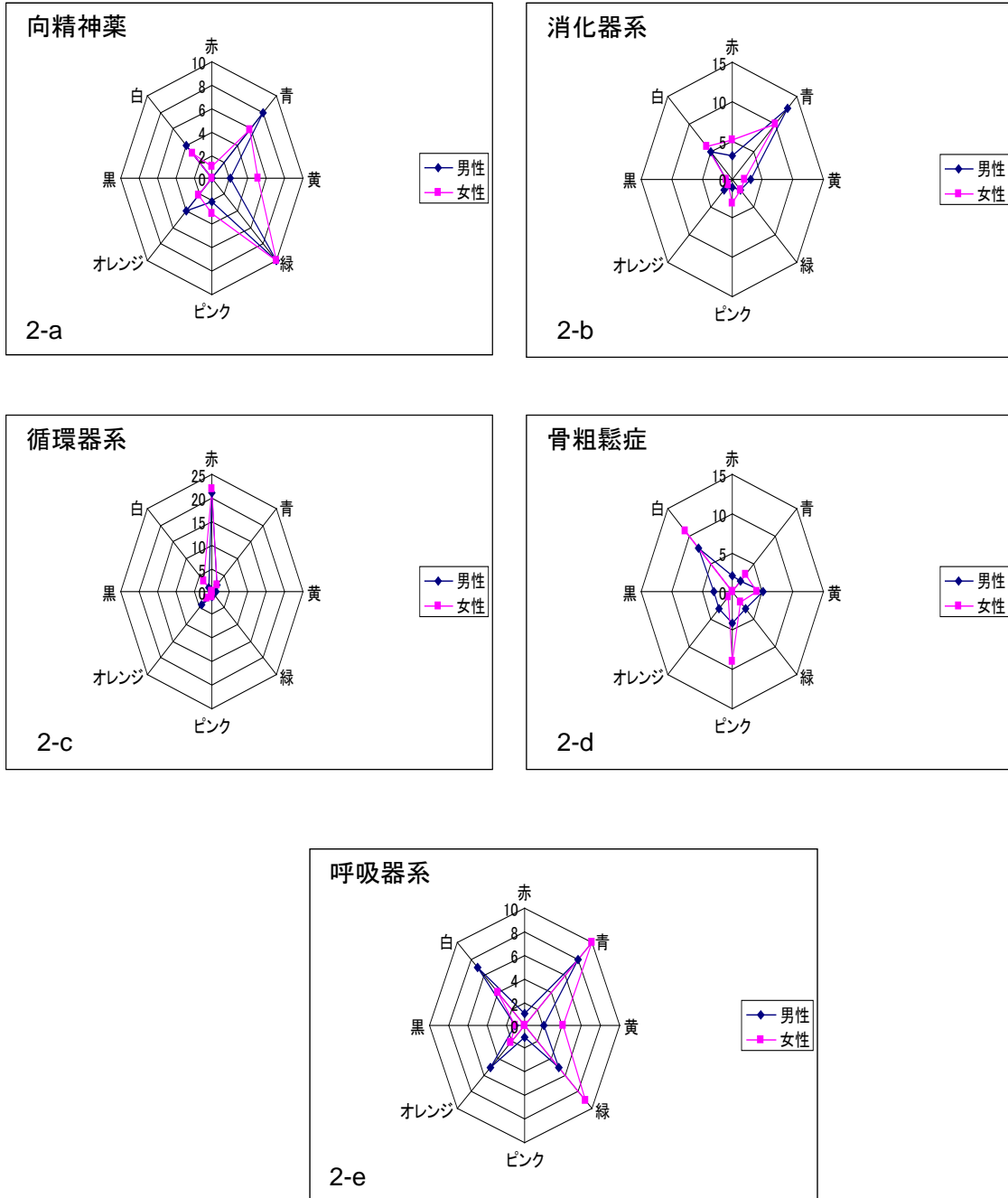


図2. 男女間における薬効別のカラーイメージ

4. 学生、薬剤師および患者間のカラーイメージ相違

次に、薬学部6年生、薬剤師及び外来患者間のカラーイメージの相違を薬効群ごとに分析し、図3 (a,b,c,d,e) に示した。薬剤師と外来患者の感じるイメージはほぼ同じ傾向であった。特に、循環器用薬のイメージカラーである赤色の選択は3者間で共通していた。

しかし、循環器用薬のイメージ以外では、薬学部6年生のイメージと他の2者でやや相違がみられた。例えば、向精神薬で青色、消化器用薬で青色と黄色、そして呼吸器用薬で黄色を選択した人が多かった。また、薬剤師が骨粗鬆症薬でピンク、呼吸器系でオレンジを選択しているのが特徴であった。

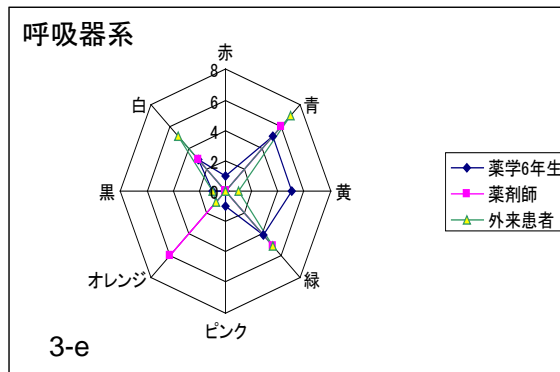
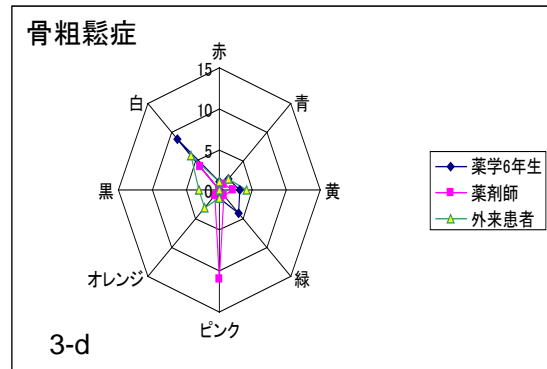
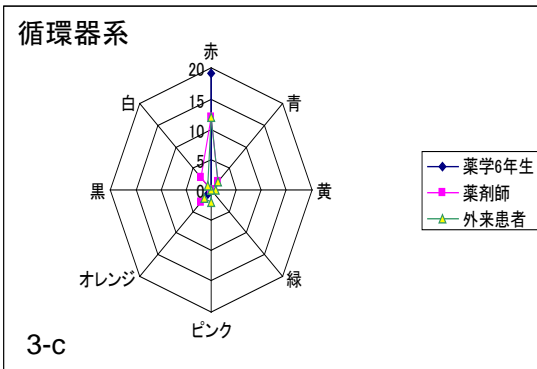
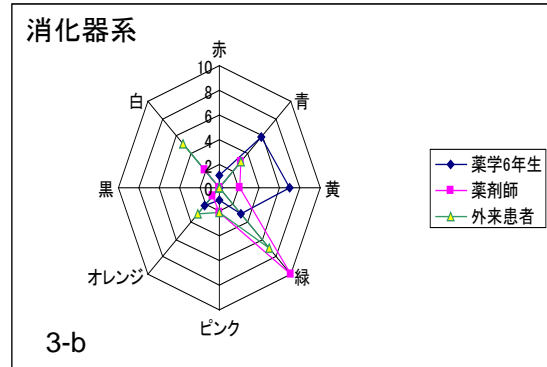
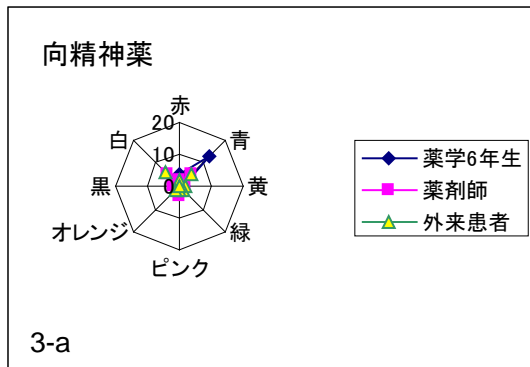


図3. 薬学部6年生、薬剤師、外来患者間における薬効別のカラーイメージ

【考察】

今回、医療用医薬品外箱の色相を調査するにあたり、マンセル色調環で主要な5色相環（赤、黄、緑、青、紫）のうち紫色を除く他の4色にピンク色を加えたものを分類の基本系統色としたが、特に青色系統は日本人の嗜好色1位で国際的にも多くの地域で最も好まれる色相である。また、この系統の色のもつ心理的イメージは、「浄化」「癒し」「解放感」などであり、これらの要素が医薬品外箱の色相として好んで選ばれる理由の一つであろう。実際、本アンケート調査結果の分析においても向精神薬、消化器系用薬、および呼吸器系用薬のイメージカラーとして青色の選択が多かった。また、青色と黄色という対極にある色の混合である緑色についても、「自然」さらには「恒常性」「安心感」「リラックス」をイメージさせることにより、消化器系用薬および呼吸器系用薬のイメージカラーとしての選択が多かったものと考えられる。一方、循環器系用薬のイメージカラーとして、圧倒的に多くから選択された赤色は、「血液」「生命」「エネルギー」に結びつくからであろう。

次に、薬効に対するカラーイメージに性差はみられなかったが、薬学部6年生、のイメージ傾向が薬剤師および外来患者のイメージ傾向とやや異なっていたのは、薬学部学生が各薬効のイメージを主に生理学的機能により抱いたのに比べ、薬剤師および外来患者は実際、日常的に調剤又は服用している薬剤自体からイメージした結果ではないかと考えられる。特に骨粗鬆症治療薬のイメージで薬剤師の多くがピンクを選択していたのは真に専門職上の認識の表れであろう。今回の調査では、外箱収集の件数が少なく、色相分類は十分ではなかったが、アンケート調査では興味ある知見が得られた。現実的な問題として、2009年の薬事法の改正に伴い、一般用医薬品（OTC）の外箱表示に関する規則が大幅に変更されリスク分類表示が義務付けられている。特に、OTCでは重要な情報が外箱に記載されておりリスクマネジメント上でも外箱の色相および文字の配色が重要である。医薬品外箱の主要色相は今後も嗜好色が中心になると思うが、ユニバーサルカラーデザインの考慮もなされるべきだと考える。

【謝辞】

本稿を終えるにあたり、アンケート調査に御協力いただいた(株)ハートフェルト稲葉一郎氏に心より感謝します。外箱収集に御協力いただいた高橋薬局並びにケンコウ堂薬局に感謝いたします。

【参考文献】

- 1) 日比野治雄：デザイン心理学の視点から医薬品におけるデザインの問題を考える、ファルマシア、45、353-352（2009）
- 2) 末永蒼生：色彩セラピー入門、PHP文庫（2007）
- 3) 大山 正、斉藤美穂：色彩学入門、東京大学出版会（2009）

【資料】

- I. 調査対象医薬品の商品名（会社名）
- II. アンケート用紙の形式
- III. アンケート調査結果（詳細データ）